

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

同じ人^{注1}、常に教へていはく、「あなかしこあなかしこ、歌よみなたて給ひそ。歌はよく心すべき道なり。われらがごとく、あるべきほど定まりぬる者はいかなるふるまひをすれども、それによりて身のはふることはなし。そこなどは重代の家^{注2}に生れて、早くみなし子になり。人こそ用ゐずとも、心ばかりは思ふところありて、身をたてむと骨張るべきなり。しかあるを、歌の道その身にたへたることなれば、ここかしこの会に、かまへてかまへてと招請すべし。よろしき歌詠み出で **a** ば、面目もあり、道の名譽もいでき **b** べし。さはあれど、所々にへつらひ歩きで、人に馴らされたち **c** ば、歌にとりて人に知らるる方ありとも、遷度のさはりとはかならずなるべかめり。そこたちのやうなる人は、いと人にも知られずして、さし出づる所には、誰ぞなど問はるるやうにて、 **x** 思はれたるがよきなり。さて、何事をも好むほどに、その道にすぐれぬれば、⁴ 錐、囊にたまらずとて、その聞こえありて、しかるべき所の会にも交はり、雲客月卿の筵の末に臨むこともあり **b** べし。これこそ道の遷度にてはあれ。⁵ ここかしこの人非人がたぐひに連なりて、人に知られ、名を挙げては、何にかはせむ。心にはおもしろくすすましく覚ゆとも、かならず所嫌ひして、やうやうしと人に言はれむと思はるべきぞ」となむ、教へ侍り **d** 。

今思ひ合はすれば、いみじき恩をかうぶれるなり。さるは、かしこきものの習ひなれば、わが子などをだに、おほろけならでは教訓することもなかりしを、かやうにうしろやすく言ひ教へけるは、また異事にあらず、管絃の道につけて、跡継ぐべき者として、世にも人にもかずへられてあれかしと思ひけるにこそ。のどかに思へば、いとあはれになむ。

(鴨長明「無名抄」による)

(注1) 同じ人……中原有安。平安末期の楽人・歌人。

(注2) 重代の家……代々神職になる家。

問一 傍線部1「歌よみなたて給ひそ」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 歌人として世に出ようとなさるな。

ロ 歌人として流行にへつらいなさるな。

ハ 歌人として和歌を詠み過ぎなさるな。

ニ 歌人として井の中の蛙になりなさるな。

ホ 歌人として世俗の暮らしに満足なさるな。

問二 傍線部2「歌の道その身にたへたることなれば」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 私は和歌の師匠であるので。

ロ 私は和歌の家に生まれたので。

ハ あなたは和歌の才能があるので。

ニ あなたは和歌が苦手だったので。

ホ あなたは和歌の家に生まれたので。

問三 空欄 a、b、c、d は二箇所ある()に入る語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ a たら b ぬ c なれ d し

ロ a たら b ぬ c な d し

ハ a たれ b ぬ c な d しか

ニ a たれ b ぬる c なれ d し

ホ a たら b ぬる c なれ d しか

問四 傍線部3「遷度のさはり」は本文中でどのような意味で使われているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 家道の衰退
- ロ 表現の類型化
- ハ 信仰のゆらぎ
- ニ 出世のつまずき
- ホ 精進のさまたげ

問五 空欄 X に入る、最も適切な語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ あやしく
- ロ あさましく
- ハ ころろにくく
- ニ らうらうじく
- ホ つぎづきしく

問六 傍線部4「錐、囊にたまらず」は慣用句であるが、どのような意味と考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 優れた人はみな世渡り上手だ。
- ロ 社会的な立場こそ優れた人を作る。
- ハ 好きであることこそ上達の早道だ。
- ニ 上手下手は生まれつきで、努力は関係ない。
- ホ 才能のある人は必ず世の中から評価される。

問七 傍線部5「ここかしこの人非人がたぐひ」と、本文中で対比的な意味で使われている語句はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ここかしこの会
- ロ そこたちのやうなる人
- ハ 雲客月卿
- ニ 筵の末
- ホ 道の遷度

問八 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「同じ人」は、筆者を自分の後継者と見なしていたので、歌人としての活動に時間を奪われるべきでないと説いていた。
 - ロ 「同じ人」は、筆者の親代わりであり、筆者はわが子に対するよりも親身に歌の手ほどきをしてくれたと感謝していた。
 - ハ 「同じ人」は、歌道の厳しさを知っていたので、筆者が多くの歌会で和歌を詠み散らし、評価が下がることを心配していた。
 - ニ 「同じ人」は、筆者に和歌を詠む場を選ぶことを勧め、そのためにはもったいぶっているという批判も甘受すべきだと考えていた。
 - ホ 「同じ人」は、歌人の地位の低さを知っていて、そのために筆者が高貴な人たちから相手にされないのではな
- いかと警戒していた。

(二)

次の文章は、戦国時代・楚の恵王が節句の食事の際、漬け物に蛭ひるが紛れていることに気づきながら、調理人・配膳役が厳しく罰せられるのを憐れんで、知らぬふりをして蛭を呑み込み、かえって腹痛を起こした、という故事に対し、その数百年後の学者王充が、この恵王の行為における三つの「不肖」(愚かさ)を指摘した部分である(うち、第一と第三の「不肖」のみ)。この文章を読んで、あとの問いに答えよ。

恵王不ルハ忍レ譴レ蛭ヲ恐ル庖厨監食ノ法皆タ當ル誅ニ也。一国之君、專セン擅セン賞ヲ罰ヲ而チ救ス人君所為ス也。恵王通ツ譴レ菹中何故有ル蛭、庖厨監食皆タ當ル伏ス法ニ然能終不以飲食行誅於人、赦而不罪、恵莫大焉。庖厨罪覺ニ而不誅セ自新アラ而改メ後、恵王赦シテ細ヲ而活イカシ微、身安ラカニシテ不病。今則不然。強食ニ害己之物、使監食之臣不聞其過、失ヒ御下之威、無シ禦非之心。不肖一也。……中略……菹中不レ當有蛭、不食投セ地。如恐ル左右之見、懷ク屏ノ隱匿之處ニ足以使蛭不見、何必食之。如不可食之物、誤ツテ在菹中、可ニ復タ隱匿、而強食之。不肖三也。

(王充『論衡』による)

(注1) 蛭……ヒル。形はミミズやナメクジに似て、体長三〜十センチ程度。多くが吸盤を持ち血を吸う。

(注2) 庖厨監食……庖厨は調理人、監食は毒味・配膳役。

(注3) 通譴……徹底して罪を取り調べること。

(注4) 菹……漬け物のこと。

(注5) 懷屏隱匿之處……そつと取り除いて見えない場所に隠す。

問九 傍線部1の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ しかしながら、最終的に飲食のことなどで処罰したりせず、許して罪を不問にすることができたならば、それより大きな恩情はない。
- ロ しかし、ヒルが紛れていたことを理由として一度人を処罰したうえで、最終的にそれを許すように進められたならば、その恩は絶大なものとなる。
- ハ けれども、飲食の不手際を理由に責任者を厳重に罰することをせず、最終的に罪を許して無罪としたならば、恵王は史上もつとも偉大な君主になれる。
- ニ だが、ヒルが紛れていたことの罪をうまくごまかしてやって、無罪放免にしてやったとしても、結局は小さなことだから、恵王が偉大だということにはならない。
- ホ だが、結局のところ飲食のことなどで人を処罰することなどできるはずもないから、許して罰しないというのは当たり前すぎて、それを大きな恩恵と感じる者はいない。

問十 傍線部2と同じ意味で用いられている「覚」を含む熟語を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 不覚
- ロ 覚悟
- ハ 感覚
- ニ 覚醒
- ホ 発覚

問十一 傍線部3は、「カンシヨクノシンラシテソノアヤマチヲキカザラシメ」と読む。この読みに従って、記述解答用紙の問十一の白文に返り点のみを記入せよ。なお、振り仮名・送り仮名は付けないこと。

問十二 傍線部4「足以使蛭不見」の読み方として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 以て蛭を使ひ見ざらしむるに足れば
- ロ 足は蛭を使ふを以てして見えざれば
- ハ 足りて以て蛭をして見えざらしめば
- ニ 以て蛭をして見えざらしむるに足れば
- ホ 足るに蛭をして見ざらしむるを以てせば

問十三 本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ロにできないような物が食事に入っていたとしても、例外なくそれを呑み込んでこそ、真の意味で臣下思いの慈悲深い君主と言えるのであって、恵王はとうていそのような慈悲深さを持ち合わせていない。
- ロ かりに調理人や配膳役を罰するのが可哀想だと思つたとしても、周囲に見られないようにヒルを取り除く方法はいくらでもあつたのに、無理やり呑み込み健康を害する結果をもたらした恵王は愚かである。
- ハ 一国の君主はもつとも重い司法責任者であるから、たとえ恩赦を施す場合でも、それがもたらす波及効果も考慮しなければならぬが、恵王の行為は感情に左右されたものであり君主として適正さを欠く。
- ニ 君主が臣下を憐れみ、慈悲深いことは結構なことだが、一時的な感情によつて、臣下の罪を恣意的に見逃してやるという態度は、国の長としてあつてはならないもので、国の秩序を大いに乱す危険性があつた。
- ホ 恵王が黙ってヒルを呑み込んだおかげで、調理人や配膳役は身も心も安らかに過ごすことができたが、恵王自身健康を害してしまつたから、君臣関係にあつては本末転倒であり、君主としては愚かであつた。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

民主主義社会において個人が大衆のなかに埋没し、個性を失って、誰でもよいようないわば無名の人物になる現象を「水平化」(平均化)と呼んだのは、一九世紀半ばのデンマーク人キルケゴールでした。本当に語ることでできる人はもう一人もいないというのが、リルケに先んじて彼の下した時代診断です。「ドイツには恋する者たちのためのハンド・ブックまである。いずれそのうち、恋人同士が腰をおろして無名で語りあえるような時代がくるだろう」と彼は皮肉っています。現代の日本でもそうしたマニユアルが巷にあふれていること、大勢の恋人たちがお定まりのデート・コースで誰でも口にするような愛のささやきを交わしていることは、説明するまでもないでしょう。

恋ですらそうした画一化されたかたちをとっているのですから、あとは推して知るべしです。反体制を訴える主張——言論の自由の象徴——までマスコミに利用され、放送コード等の枠内で毒抜きされて規格化された商品として流通しています。「反抗」だの「不良」だの「不^レ良」だので売り出す「個性派タレント」として同様です。「全体主義の政体になつていなくとも社会の統合は進んでいる。社会体制は反体制をも包みこんでその意識を一定の型にはめこむところまで来ている」(Th・W・アドルノ^(注1))。私たちは陰に陽に管理され平均化された社会に生きており、個人は自由であるかのような外観のもとで全体のなかに呑みこまれてしまっているのです。

全体Ⅱ社会が個人に先立つことを教えたプラトン、アリストテレスの理想国家や、その戯画である全体主義国家においても、それらの対極に位置する民主主義国家においても、個人と全体とは美しい調和を保つてはいません。個人は全体のうちに吸収され、誰とでも交換できるようなありさまで生きているのです。こうした動きを私たちは全体化と呼んでいました。この全体化がどういうものか、もう少し立ち入って考える必要があるでしょう。

² プラトンの国家の支配者は善のアイデアを知る哲学者でした。支配者に虚偽を語る権利さえ与えられていたのは、善そのものを知る哲学者だけは個人的な欲望から解放され、全体Ⅱ社会Ⅱ国家がどう運営されるべきかを知っていると考えられたからです。神のように公平無私でありすべてを冷静に判断できるからこそ、哲学者は国家のために、ひいては国民のために最善の政策をとりうるのです。真理そのものを認識でき、全体を眺望できるといふ信念が、全体化の前提をなしているのです。この信念はしかし欺瞞ではないでしょうか。プラトンの描く支配者は最高の素質をもち最高の教育を受けて初めて支配者に選ばれますが(3)、それでも彼は神ではありません。その判断にはおのずと限界があります。彼はその限界を踏み越えてしまいました。「欠陥児」が不幸であり社会にとつても有害だなどと決めつけることが、どうして彼にできるでしょう。プラトンの哲学者はソクラテスの「無知の知」を忘れ、まったく知識者に成り上がってしまったのです。

全体を知っているというおごりが全体化を導いているのは、アリストテレスや和辻哲郎においても同じです。アリストテレスが「健全な」(あくまで彼から見て)子どもをつくるための条件を事細かに設定する滑稽さは、知者を自負することに由来します。個人の私生活にまで介入するのは、全体に精通している自分のほうが各人自身よりも各人をよく理解していると信じているからです。後者が「滅私奉公」を説くのも、公(国家ないしこれと混同された天皇)にとつて何が最善かを自分を知っているという錯覚があればこそでした。

これらの人びとは、全体Ⅱ社会が個人を超えると主張しておきながら、全体を見下ろす位置にまで自分(個人)を上昇させるといふ自己矛盾を犯したのです。こうしてみると全体化とは、自分(たち)が全体だと誤解ないし自称し、自分以外のものの独立性を奪い、自分のなかに呑みこんだり、自分のそとに排除したりすることなのです。言い換えれば、自分(たち)の視点から他を裁くことなのです。個人がみずからの眼で恋人を選ぶことを禁じ、「劣った」子どもが自分なりの生を選ぶ可能性を摘みとつたとき、哲学者はみずからを全体そのものと勘違いして彼らを裁いたのでした。

民主主義社会における全体化、水平化にしても事情は変わりません。私たちは全体化の波に呑みこまれているのみならず、みずからそれに加担しているのではないのでしょうか。キルケゴールが水平化という概念を提出した背景には、「コルサル事件」と呼ばれる個人的な体験がありました。週刊新聞「コルサル」が、彼の珍妙な外見やかつての婚約者との関係を漫画付きで嘲笑する記事を連載し、市民もその尻馬に乗ったという出来事です。コペンハーゲンの誰も彼もが——まさしく置き換え可能です——、彼の姿を見かけると笑ったりからかったりしたのです。彼は日記に次のように書きつけています。

粗暴と野卑のどれほど忌まわしい専制政治がここコペンハーゲンを支配しているか、それに気づく者は一人もい

ない。なぜなら誰もがみな、ほんの少しずつそのカタボウをかついでいるからだ。

人間を水平化し平均的ではない人物を排除する全体化の動きに大衆はみずから関与しているのですが、それができるのは全体Ⅱ社会という後ろ盾があるからです。かくして民主政治は、自分を全体と同一視した諸個人から成る大衆が執り行う専制政治にはなりません。

『コルサル』が芸能ジャーナリズムなど現代日本のマスコミを連想させることから推察されるように、私たちがとて同じです。似たようなライフ・スタイルを選んでいる、あるいは選ばれていることによって、私たちは他の人びともそうするよう暗黙のうちに要求します。身体、服装、行動その他において平均的でない子どもを同級生全体（傍観者を含む）がいじめるように、私たちは、へふつう〜ではない人間を自分たちと同じにしようとし、それができなければ軽蔑、無視などさまざまな仕方で攻撃します。場違いな服装をすれば陰に陽に非難するでしょう。どんな服装をしようとする人の自由はずなのに、全体ないし多数派の力を振りどころにして、他者を自分（たち）と同じにしようとしているのです。

プラトンの支配者のような超エリートであっても、人間は神ではありません。全知の神ならば各人の髪の毛の数まで数え、全体を隈なく照らし出すかもしれませんが、人間は違います。それにもかかわらず、みずから正義か真理でもあるかのようにふるまい、他者を自分と同じにしました裁くのは、思い上がりでなくて何でしょう。自分を国家という全体と混同する場合には、他者を誰でもよい者に仕立ててしまいますし、世間という全体と混同するときには、さらに自分自身をもそうしてしまいます。しかし、他者と私とはけっして同じにはできないはずで

それを端的に示すのが死の不安です。自分の死を凝視するとき他の人びとの関係は輝きを失い、孤独な自己自身に突き当たります。死の闇ないし「夜こそはお前を隣人から分けへだててくれる」のであり、全体のなかに呑みこまれえない自分固有の生が浮かび上がるのです。

それでは、この孤独のなかでは他者は無意味なものとして消えていくのでしょうか。けれども私たちは、人間が本質的に社会的な存在であり、自己には他者がたえず侵蝕していることをみてきました。だとすると、死の闇がいったん私から隔てた隣人は、今度は全体化されえない新たな姿でふたたび現れるのではないのでしょうか。百数十万もの人びとが殺されたと推定されているアウシュヴィッツ強制収容所を生き延びた精神科医フランクルは、その体験をこう振り返っています。「たとえもはやこの地上に何も残っていないとも、人間は——瞬間であれ——愛する人間の像に……身を捧げることによって浄福になりうるのだ」。死と隣合せの悲惨さわまりない収容所のなかで、囚人たちは愛する者のオモカゲを思い浮かべることによってみずから支えたのでした（フランクルの場合は妻でした。彼はまだ知らなかったものの、すでに妻は死んでいたのですが）。死は人を孤独にすると同時に、他者に結びつけもするので

「わたしは／あなたではない」（谷川俊太郎『みみをすます』）という、互いのずれば、全体化を打ち砕くにとどまらず、こうして新たな意味を帯びてきます。私があなたを私と同じにすること、あなたが私をあなたと同じにすることを断念させるだけではありません。私とあなたのどちらも、他者と交換できない存在になるのです。私が、あなたとも誰とも違う私であるように、あなたもやはり、私とも誰とも異なるあなたなのです。全体化の放棄は、相互の独自性をかけがえのないものとして受け入れることにつながるでしょう。

ところで、E・レヴィナス⁶はもつと踏みこみ、私と他者は対等ではないと語っています。私が他者と向きあい、他者の顔を見つめるとき、あるいは他者のまなざしに見つめられるとき（六か月の幼児が他者の顔やまなざしに眼を向けることを思い出します）、他者が私にはなく、私が他者に対して責任ある者となるのです。他の誰でもないこの私とその他者に責任を有し、私こそがその他者のために存在するのであって、そのかぎりでのみ私は誰とも置き換えられない私だ、とレヴィナスはいうのです。「私はすべての人にとって代わることができず、しかし誰一人、私にとって代わることができない」。他者に尽くすという責任は私独自のものであり、他の誰にも譲り渡すことができません。相手に対して、私にも尽くすよう望んではなりません。責任は私にだけ課せられているのです。私は、「他者と同じではなく、しかも他者に無関心ではられない」のであり、この義務はまた私固有の自由でもあるのです。

一五歳でアウシュヴィッツに送られた、エリエゼルというユダヤ人の少年がいました（到着当日、少年は、炎の上がる穴の中にトラックが積み荷を落とすのを近くで目撃します。積み荷は幼児たちでした）。彼と父は、そこからブーナの収容所へ、さらにグライヴィッツの収容所へと移されます。何千という囚人たちが、雪と寒風のなかをブーナから夜どおし走らされます。立ち止まった者や倒れた者は、あるいは銃撃され、あるいは後から走ってくる人びとに踏みし

かれて大勢死んでいきました。三年間共に耐えてきた老いた父親を見捨てようとする息子もいました。足に傷を負っていたエリエゼルは、道端へ出るか倒れるかして痛みと疲労と寒さから逃れようと思うのですが、喘ぎながら隣を走る父親の姿がそれを引き止めます。「私には勝手に死んでゆく権利はなかった。私がいなくなったら、父はどうするのか。私は父の唯一の支えであった」(E・ヴィーゼル^{注3})『夜』。父親のために生きるということが少年に課せられ、それは少年以外の誰も果たしえなかったのです。

(木田元、須田朗『基礎講座 哲学』による)

(注1) アドルフ……ドイツの哲学者、社会学者。

(注2) レヴィナス……フランスの哲学者。ユダヤ人であったために、親族の多くをナチスに殺害されている。

(注3) ヴィーゼル……ルーマニア生まれのユダヤ人の作家。アウシュヴィッツ強制収容所へ収容された経験を持つ。

問十四 傍線部A・Bにあてはまる漢字二字を、それぞれ記述解答用紙の問十四の欄に楷書で記入せよ。

問十五 傍線部1「社会体制は反体制をも包みこんでその意識を一定の型にはめこむところまで来ている」とあるが、

この説明として当てはまらないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 社会は、体制派も反体制派も同じように平準化してしまうということ。
- ロ 社会は、体制派だけでなく反体制派にさえ位置を用意しているということ。
- ハ 社会は、体制派と同じような型を反体制派にも当てはめているということ。
- ニ 社会は、体制派も反体制派も自由に選べるように見せかけているということ。
- ホ 社会は、体制派も反体制派も一つの個性として商品化してしまうということ。

問十六 傍線部2「プラトンの国家の支配者は善のイデアを知る哲学者でした」とあるが、では、①民主主義社会の「支配者」は誰か。②また、民主主義社会の支配原理とは何か。それぞれ次の中から選び、解答欄にマークせよ。

- イ 責任 ロ 全体化 ハ 大衆 ニ 他者 ホ 哲学者 ヘ ふつう

問十七 本文の趣旨を踏まえて、空欄 3 に入るべき文章として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ プラトンが「最高の」人物であることは神が保証してくれますが
- ロ 「最高の」とは誰から見てでしょうか。結局はプラトンから見てにすぎません
- ハ プラトンが考える国家においては、彼自身が決めても大きな問題は起きないでしょう
- ニ 「最高の」素質を持ち「最高の」教育を受ければ、ほとんど神になり得たかもしれませんが
- ホ 「最高の」素質を持ち「最高の」教育を受けた一人がプラトンであることはまちがいありません

問十八 傍線部4「世間という全体と混同するときには、さらに自分自身をもそうしてしまいます」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「世間」は自分と他者との差異化を許さないから。
- ロ 「世間」は他者を自分とだけ交換可能な存在とするから。
- ハ 「世間」とは自分を基準にしてイメージされた集団だから。
- ニ 「世間」は自分を読者としたマスコミが作り出す幻想だから。
- ホ 「世間」という単位の基準となるのは、自分の社会への帰属意識だから。

問十九 傍線部5「全体のなかに呑みこまれえない自分固有の生が浮かび上がるのです」とあるが、「死」にこのような働きがあるのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人の死にとって他人の存在は無意味だから。
- ロ 人が死ぬときには一人になってしまうから。
- ハ 人は死に際して最も不安な状態になるから。
- ニ 人は他人の死を死ぬことは決してできないから。
- ホ 人は死ぬときにはじめて自分の生の意味を知るから。

問二十 傍線部6「E・レヴィナスはもつと踏みこみ、私と他者は対等ではないと語っています」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ フランクは人は社会的存在だと言っているが、レヴィナスは人は個別的存在だと言っている。
- ロ フランクは人は孤独によって結びつくと言っているが、レヴィナスは人は責任によって結びつくと言っている。
- ハ フランクは人は孤独によって結びつけられると言っているが、レヴィナスは人は家族によって結びつけられると言っている。
- ニ フランクは人は死と向き合うときに互いに固有の存在になると言っているが、レヴィナスは人が死と向き合うときには互いに支え合う存在となると言っている。
- ホ フランクは自分と他者が支え合うことに「私」の存在意義を見いだすと言っているが、レヴィナスは人のために生きることに「私」の存在意義を見いだすと言っている。

問二十一 本文の最後にアウシュヴィッツ強制収容所の話を持ってきたのはどのような趣旨からだと考えられるか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 民主主義社会において専制的な体制を許さないためには、プラトンのような哲学者をヒトラーのような独裁者にしないことが肝心だと示すため。
- ロ 現代社会ではマスコミが人々に気づかれないように同じような人生を選ばせているが、死に際してのみ人は固有の存在になれることを示すため。
- ハ 現代社会では人は知らず知らずみんなと同じような没個性的な生き方を選んでいるが、それは人が社会的な存在であることを忘却しているためだと示すため。
- ニ 現代社会において個人が全体のなかに呑みこまれずに自分自身の生の意味を持ち続けるためには、他者との個別のつながりが是非必要であることを示すため。
- ホ 民主主義社会を全体主義に変容させないためには、誰もがのつべりとした同じような人間になるのではなく、ただ一人のためだけに生きることの大切さを示すため。

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

現在のいわゆる文明世界は、農耕と定住という生存形態の上に形成されてきた。だがその農耕は、この五百年來「産業」という新しい富の形成形態によって切り崩されており、今では農耕さえ「産業」の一形態と化してしまったかの観がある。農耕は人を土地に結びつけ、人と土地との結びつきをベースに生存の糧と富を作り出す。今では農耕を「農業」と称し、人間の全般的な生産活動の中でもっとも基礎的なものとして、いわゆる「第一次産業」に区分するのが通例だが、それは人間の生存形態が「生産」によって特徴づけられ、その「生産」活動を人間が合目的¹⁾に企てる「企業」とみなす、近代の産業主義的観点から捉えなおしてのことである。その意味で「農業」とは、産業化された農耕なのであって、農耕がもともと「産業」の一部なのではない。「産業」とは、農耕とはまったく別の生存形態や世界の組織形態を要請するものなのだ。

「産業」は農耕に必然的な土地と人と作物との結びつきを断ち切り、それぞれの要素を抽象的に分離して（原料、工場、労働力、製品）その合目的な組み合わせによって富を作り出す。だから産業化は農村の解体に始まり、その解体の拡大によって進展する。「産業」は生存条件をさまざまな要素に分解し、その諸要素の組み合わせと移動可能性によって成り立ち、そのシステムのなかに移動と交通とを内包している。その「産業」システムは近代のヨーロッパによってもっとも効果的なたちで形成され、数百年かかって全世界に広まった。われわれが生きているのは、その「産業」システムが全世界を覆い、定住を必然としていた農耕さえ「産業」と化して、それが人間の生存形態の基盤を根本的に変えつつある時代なのである。だとすれば、人類はいま数万年単位の生存条件の変動を経験しているのであり、「近代」と呼ばれる時代に、あるいは「近代化」と呼ばれるプロセスのなかで、世界の各地でそれぞれの地域のそれぞれの条件にしたがってさまざまな形で経験されてきた社会変動やそれによる試練は、定住から移動ないし流動という定式で表現される人類史的な巨大な転換期の、個々の具体的な局面だということになるだろう。

ひとの一生を七、八十年として、その時間さえ、小さな人間にとつては変化なしには過ぎないが、ひとりの人間が自分の生の尺度にしたがって意味づける社会的環境の変化も、時のスパンを五百年、五千年と広げていったとき、思いもかけぬ様相を帯びて現れることもある。もちろん一人ひとりの人間にとつて意味があるのは、その具体的な生であり、そこで意味のベースとなる時間はそれほど長くはないだろう。だが、世界がひとつになり、ひとがどこにいても世界との関わりがなかでしか生存していないということは、「人類」という観念にもはやたんに理念的なだけではない現実性を与え、われわれの生の具体的な時間もまた、人類史的なパースペクティヴのなかに置きなおされるということでもある。だから、われわれが生きている現在の世界の変容を、ときにはそんな重層的な時間のパースペクティヴのなかで考えてみる必要がある。われわれの身を寄せているこの船は、どんな潮に導かれているのかと。

*

二十世紀は少なくともここ数千年來、人間の移動がもっとも広範かつ大規模に起こった時代だといえる。一九世紀に人間の移動手段はそれまでの動物から機械に代わり、馬やラクダは鉄道と機関車に、あるいは自動車にとつて代わられた。船の動力も、かつての奴隷の労働や自然の風の利用から、内燃機関やモーターに代わった。やがて航空機が登場するが、これは障害の多い地上の制約をとうとう離脱して、天候以外にほとんど制約のない空中を、自在に、それも格段のスピードで移動する可能性を人間にもたらした。二十世紀初め八十日かかった世界一周を、いまではたった一日強で果たすことができるのも、陸と海に続いて空が人間の移動空間になったためである。

だがもちろん二十世紀が「移動の時代」であるのは、たんに交通手段が発達したからではない。なにより、人間の大規模な移動を促す条件がさまざまな局面で強力に作用するようになった。そのもっとも基本的な条件となっているのは、世界規模で推進された産業化だ。産業化はただでさえ大量の人の移動を引き起こす。一八世紀のイギリスを思い起こすまでもなく、産業の形成は大量の労働者を必要とし、そのために農村が囲い込まれて人口を排出することになる。そして工場のある都市は人口を集めて繁栄し、それが没落する農村からさらに人口を吸い寄せる。

このような「農村脱出」によって近代都市の住人たる「大衆」が出現することになる。その特徴は、大地や旧來の共同体との結びつきを失って都会に群集として浮遊する、帰属なきばらばらの個人の集合だということだ。だがそこには、その個人に担われた新しい意識も積極的な力学として働いている。近代の「自由」の理念の具体的な発現は、旧來の共同体的生活からの「離脱」を、過去や出自といった「自然的」拘束からの「解放」として、積極的に生きた人びとの意

識と不可分だった。そこでは故郷を「出ること」、起源の拘束を断ち切ることは、個人の自立の表明であり、個人にとっては「自由」の獲得でもあった。都市とは、産業による新たな富の生産の場であるとともに、そのような「自由」と不可分の空間でもあった。だから多くの人が「自由」を求めて都市に出る。都市はどのように「入ってゆく」ところではなく「出てゆく」ところとして位置づけられた、拘束されない何かへの「出口」だったのだ。

だが変化や流動化、それによる既存の秩序の崩壊は、それに対するあらゆる傾向の反動を呼び起こす。個的な自由の発現は、個を包摂する集団的価値や統合原理の「喪失」とみなされ、近代社会の生存形態は「解体」や「腐敗」といった用語で語られた。そして「離脱」によって表明される「自由」や「解放」は、起源の喪失、「根」の喪失として否定的に捉えられ、その「喪失」への危機感や被害感が、回顧的に「失われたもの」の理念化を引き起こす。そこから、人びとを新しい神話や編み出された「伝統」に繋ぎとめようとする、反近代主義のさまざまな傾向を生み出すことになる。だが、どんな幻想を作り出そうとも、〈産業化〉そのものを拒むのでないかぎり、人間が所与の土地との結びつきから離れ、狭い生活圏の束縛から離陸してゆくのを止めることはできないのだ。

*

そのような産業化や都市化は一九世紀にはヨーロッパだけの現象だったが、二十世紀にはそれが世界的に拡大するようになった。コロンブス以来四百年、ヨーロッパ諸国は世界のほとんどの地域を植民地として支配下におき、それを自己のシステムに組み込むことで内に「近代」の繁栄を築いてきたが、その覇権の頂点から始まった二十世紀は、ヨーロッパとそれ以外の地域の「歴史的」落差がしだいに埋まる時代でもあった。つまりヨーロッパは世界に「近代」を輸出し、「近代」の価値基準や組織原理が世界的な基準とされるようになった。だからこの世紀を通して、世界の各地で「近代化」が一貫した課題となる。そしてその原動力とみなされたのがほかならぬ〈産業化〉だった。産業化による発展、日本の明治期も、ソビエト・ロシアの初期の五カ年計画の時代も、植民地から独立した新興諸国の最初の課題もそれだった。

それとともに二十世紀の初頭には、一方で市場や覇権をめぐるヨーロッパ諸国の対立が世界規模の戦争を引き起こすにいたり、他方で産業システムの矛盾から生じた階級闘争が国境を越える革命を引き起こすようになった。そしてこの世界戦争による未曾有の「動員」と、ロシア革命の生み出した百万を超える亡命者や、無数の国内追放者が、戦争と大砲の轟音とともに「移動の世紀」の幕開けを告げたのである。

戦争は「動員」する。「動員」とは人を駆り出して動かすことだ。人びとは住んでいる場所から徴用され、兵営に入り、前線や占領地に送られる。世界戦争の戦地は広い。国の外に旅行などする気のない人びとも、かまわず遠い戦地に送られる。シベリア生まれの人間がウラルをはるかに越えてベルリンにまで行き、北海道の人間が南洋の島々を転戦する。それだけでなく、二度の世界戦争にはアジアやアフリカの植民地から、大勢の人びとが植民地本国に兵士として徴募され、そのときだけはヨーロッパ諸国の「国民」として遠い各地の戦場に赴いたのだ。

*

人間は定住することにあまりになじんでいるため、移動や環境の変化が不安を誘う。あるいは言語や文化の違う環境が疎外感を生む。そして移民を迎える側も、異質な要素の侵入による自分の環境の変化に不安を抱く。それだけでなく、世界の全般的な流動化が個や共同体のレベルで「アイデンティティの危機」を生む。だがひとつになったこの地球上で、誰も自明で不変な環境に生きていくわけではない。もちろん流動の時代であればこそ、国家や民族の神話がふたたび担ぎ出され、そこに抛り所を求めるだけでなく、その価値を原理に社会を再統合しようとする動きも現れる。けれどもそうした逆行の試みが、輪をかけた混乱と抗争しか招かないのは二十世紀の歴史がすでに証明している。

〈アイデンティティ〉が不変の実体への帰属だと考えられたのは、農耕が帝国の基礎となった時代の遺物なのかもしれない。だが農園さえ、いまではビルの階上にでも作られる。人間が産業化の所産のすべてを捨てるといふならいざ知らず、大地との関係や帰属や〈アイデンティティ〉のありようは、この移動の時代に当然変わらざるをえない。なぜなら、それを促しているのはどんな政治やイデオロギーでもなく、世界の現在を作り出してきた人間の全般的な生存条件の変化なのだから。

移動の時代の遠い発端で、世界進出を開始したヨーロッパが最初に到達したのはカリブ海だった。そこではヨーロッパとの暴力的な出会いのなかで原住民がほぼ絶滅し、その後にはまず大西洋の向こうから、そしてやがては太平洋を越えてやってきた世界各地からの **A** たちだけの「新世界」が作られた。いま「クレオール」と呼ばれて注目されるこの世界は、 **B** の不在を出発点とし、世界の各地から多様な要素を受け入れて複合的に形成され、みずからがつね

に **C** の途上にあることを意識している。そこではアイデンティティとは、どんな単一の起源や本質に還元されるものでもなく、それ自体複合的なものとして形成され、そのつど編み直される帰属のバランスのことだ。移動というより暴力的「移植」の実験場ともいえるカリブ海の経験が、現在の世界のモデルとなるとは言わないが、そこにひとつの先例を見ることはできる。たぶん長い射程で考えれば逆行できないだろうこの「移動の時代」に、それに見合った住まい方を見いだすには、「危機」⁴ を唱えて身構えるより、未知の状況に積極的に対処する創意こそが必要だろう。

(西谷修『離脱と移動』による)

(注1) 合目的的……事物の在り方が(あらかじめ)一定の目的にかなっている様子。

問二十二 傍線部1「〈産業〉とは、農耕とはまったく別の生存形態や世界の組織形態を要請するものなのだ」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 分業体制によって新たな富の形成をめざす産業の段階では、日々の糧を得るための営みであった農耕は農業製品の社会的生産過程に組み込まれ、その市場は国境さえ越えて世界化していくので、大地や自然との歴史的絆が希薄になってしまう。

ロ あらゆる分野に機械を導入して新たな富の形成をめざす産業の段階では、個人の技量が生かされる場であった農耕は農業製品の均一な生産過程に組み込まれ、旧来の生活習慣が国境さえ越えてグローバル化して、ローカルな特性が失われてしまう。

ハ 利潤の追求を最優先して新たな富の形成をめざす産業の段階では、超過利潤を目的としない農耕は、自動車や家電製品と同列の農業製品の生産過程に組み込まれ、世界的な価格競争に参入する場合もあり、自給自足体制が崩壊する恐れが生じることになる。

ニ 生産過程を統合して新たな富の形成をめざす産業の段階では、集落的規模の労働であった農耕は国際的規模の労働による農業製品の大量生産過程に組み込まれ、グローバルな経済循環の打撃を受ける場合もあり、自給自足体制が維持できなくなることになる。

ホ 流通機構の拡大を通じて新たな富の形成をめざす産業の段階では、個人的消費のための手仕事であった農耕は農業製品の市場原理に組み込まれ、生産者の意向を無視して生産調整が強いられる場合もあり、大地との有機的結びつきが危機に瀕することになる。

問二十三 傍線部2「われわれの身を寄せているこの船は、どんな潮に導かれているのか」という問いかけに対して著者が想定している答えはどのようなものと考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人類が「ヒト」という種としての共通項を認識しながら、社会的には閉鎖的な共同体を維持してきた時代は終わったのだから、今後は誰もが「ヒト」から「人間」への価値観の移動にふさわしい生き方を実践しなくてはならない。

ロ 人類が実感を伴わない観念だった時代は終わり、誰もが地球という共同体のメンバーとしての自覚とともに何処にでも移動できるようになったのだから、私たちは変わりゆく世界の現状を前提にして新しい時代に進まなくてはならない。

ハ 人類は生物としての「ヒト」から自然を支配する「文明人」に変貌する過程で地球を自己の利益の実現だけに利用してきたが、文明の衝突が最終局面に達した今日では、誰もが移動の可能性を信じて文明の未来を模索しなくてはならない。

ニ 人類が抽象的イメージだった時代は過去のものとなり、今や人びとは国境を越えて自由に移動しあっているのだから、私たちは運命共同体としての地球に生きていることになり、互いが互いの行動に直接間接に責任をもたなくてはならない。

ホ 人類は対立と抗争を繰り返して文明を構築してきたが、理性の勝利を誇った西欧文明が二度も世界戦争を引き起こした後では、地球の運命の担い手は近代化を遂げた国々から、近代化を反面教師として受け止めた国々に移動しなくてはならない。

問二十四 傍線部3「だが、どんな幻想を作り出そうとも、(産業化)そのものを拒むのでないかぎり、人間が所与の土地との結びつきから離れ、狭い生活圏の束縛から離陸してゆくのを止めることはできないのだ」とは、具体的にどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 農村的共同体が都市化と機械化を通じて解体した歴史を否認して、古き良き時代という偽りの起源を強調したところで、近代以降の生産様式が拘束的人間関係の崩壊を前提として発展した以上、ムラからの離脱の世界化は避けられない。

ロ 農村的共同体の抑圧的な過去に目をつぶり、生産中心主義によって貴重な人間性が失われたという寓話を作り上げて、近代以降の生産様式の発展自体が人間の本性に基づいていた以上、閉鎖的共同体からの離脱には合理的根拠がある。

ハ 旧来の出口のない共同体からの離脱に抵抗して、過去の黄金時代という架空の原点への回帰を唱えてみても、近代以降の社会が人間活動の合目的性の帰結として新たな富の生産過程を成立させた以上、出口が開かれる事態は不可避的である。

ニ 因襲的で閉鎖的な共同体からの離脱に反発して、起源の神話という虚偽の記憶を作り出したところで、近代以降の社会が自然と人間を切り離す新たな富の生産形態を前提とした以上、人びとがより開かれた集合性へと向かう傾向は必然的である。

ホ 家父長的共同体からの離脱を負の記憶とみなすことで、人類の牧歌的幼年期という神話を編み出そうとしても、近代以降の社会が封建的主従関係を乗り越えることで新たな富の生産過程を創出した以上、匿名の共同性の展開を妨げることはできない。

問二十五 本文中の空欄

A

B

C

解答欄にマークせよ。に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、

- | | | | |
|---|-------|------|------|
| イ | A 難民 | B 伝統 | C 形成 |
| ロ | A 移民 | B 起源 | C 変成 |
| ハ | A 植民者 | B 歴史 | C 発展 |
| ニ | A 労働者 | B 神話 | C 変遷 |
| ホ | A 到着者 | B 実体 | C 変化 |

問二十六

傍線部4「危機」を唱えて身構えるより、未知の状況に積極的に対処する創意こそが必要だろう」とは具体的にどのようなことか、著者の考えに即し、「アイデンティティ」と「移動」の二語を用いて二〇字以上二八〇字以内で説明せよ。(解答は記述解答用紙の問二十六の欄に楷書で正確に記入すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。)

〔以下余白〕

早稲田大学 法学部
2017年度 入試問題の訂正内容

<法学部 一般入試>

【国語】

問題冊子4ページ：設問（二） 本文3行目、4行目（計2カ所）

（誤）

庖

（正）

庖

以上